地域で戦争を語りつぐ

井上　弘　氏

井上氏は、一九五五年生まれ、熱海市で小学校の教諭をしておられる。小田原地方史研究会会員でもあり、「戦時下の小田原地方を記録する会」（以下、「記録する会」と略す）の発起人・事務局としてご活躍中である。一九九二年八月、同会は『焦げたはし箱―語りつたえよう戦時下の小田原―』を刊行された。今回は同書の紹介も含め、会活動の実際、今後の課題などについてお話をいただいた。

一、「戦時下の小田原地方を記録する会」について

この会は、「市民と様々な戦争との関わりを記録していこう」という趣旨のもとに一九七九年に発足した。会員は三〇～五〇歳代の教員五名である。冊子「戦争と民衆」を一九八〇年より年二～三回発行し、九二年七月で二八号を数えた。「戦災・空襲を記録する全国連絡会議」のメンバーとなっている。

全国には、空襲被災都市を中心に、一〇〇余りの戦災・空襲を記録する会が活動している。空襲被害の記録を中心に活動している会が多いが、こうした会の近年の全国的な動向としては、（一）空襲から戦災を記録する運動へ、（二）外国人の被災記録などの国際連帯としての運動へ、（三）体験者から若者を主人公とする運動への方向が提言され、従来の証言集の出版などから、戦争遺跡の保存（松代大本営、名古屋軍需工場地下トンネルなど）や資料館づくりへと、活動内容の重点が移ってきていることがあげられる。しかし、同時に新しい問題点も出はじめてきている。たとえば、遺跡保存・資料館づくりとなると、行政とのタイアップが必要になるが、えてして加害体験の視点が抜け落ちてしまう危険性があることなどである。こうしたことから、「記録する会」は行政とは一定の距離をおいて活動している。

二、冊子「戦争と民衆」の発行

冊子「戦争と民衆」は毎号一〇〇〇部発行し、小田原市内の三書店で無料配布している。読んでもらうことを主眼に無料にしているわけだが、地元新聞の紹介などもあり、二週間で五～六〇〇部がはけている。主に体験者からの聞き取りを中心に掲載している。手記は活字にしやすいという利点があるものの、高齢者の場合、書くこと自体が困難であり、また、自己に不都合なことは書かない傾向もある。また、文書が一人歩きする危険性もあるので、手記の形式は避けるようにしている。聞き取りだからこそ可能な記述があると考えている。

三、掘り起こしの事例

『焦げたはし箱』は、既刊の「戦争と民衆」を中心に編集したものであるが、その中からいくつかの掘り起こしの事例を紹介したい。

元特高警察官だった人に聞き取りをおこなった時のことである。内山の外人収容所についての証言を得られたが、その証言によって彼が「特高」であったことが明らかになってしまうため、証言の掲載を拒否された。その人の死後、生前の本人と遺族の了解を得て掲載させていただいたが、伏せておきたい過去に触れざるをえない点など、対応の難しいケースを体験した。

「記録する会」は、戦災や空襲の被害記録にとどまらず、市民と戦争との関わりを記録することを方針にしているが、小田原の空襲についてはかなり意識してとり挙げた。市民の歴史意識を視野にい

れることを重視したためである。「小田原にも空襲があった」ことは市民の理解を得易いのである。

箱根は、本土空襲の危険性が高まるなかで、安全の確保と防諜の面から、日本との交戦国でない外国人の居住地に指定されていた。その外国人についての調査・聞き取りの中で、箱根を非戦闘地区にするよう、政府がスイス経由で連合軍に要請した、という話がでてきたが、きちんと追跡調査をしなければならないだろう。また、箱根には当時三〇〇〇人くらいのドイツ人が住んでおり、彼らとの間に混血児も生まれたらしいが、地元の人はなかなかこれについて話したがらなかった。

聞き取り調査を通じて感じたことは、地域は世界の縮図であるということであった。また、語り手はかなり高齢になっており、インタビューした四〇人のうち、すでに八人の方がなくなっている。聞き取りはあと二、三年が勝負であり、敗戦五〇周年である一九九五年をひとつの目標として考えている。

高齢者の方の話は家族の人も聞いてくれない、ということから、まず自分たちの家族・親類への聞き取りを行おう、家庭の中で語り継ごうということで、会員自ら実践している。しかし、会としては、「語り継ぐ」というよりは、とにかく記録を残す、ということに力を入れている。残った記録をどう使うかは、後世の人の仕事だと考えている。

四、今後の課題など

「記録する会」は、毎年八月に講演や映画などの集会を実施してきたが、参加者の減少、メンバーの固定化、財政負担などで継続がうまくいかず、一九八六年で終止符をうった。現在は、とにかく体験をテープにとる、ということを重点にしているが、今後の課題として次の諸点が挙げられる。

戦争遺跡や遺品保存への働き掛け、未実施の戦争体験（在日朝鮮人、満州移民、シベリア抑留など）の掘り起こし、体験者の高齢化に伴う聞き取り調査のスピード化、などである。

また、『焦げたはし箱』については、「戦争を知らない世代」のルポが読者にどう評価されるか、若い世代に売れないのではないかといった問題点をかかえている。

質疑応答では、行政とどうかかわっていくか、今こそオーラルヒストリーの可能な時代ではないか、住民の声や市民の運動が行政を動かすのではないか、当面の問題として会は資料収集・保存をどう進めるか、などをめぐって活発な議論が交わされた。

（奥田和美）